

森有正著「光と闇 - 森有正説教・講演集 - 」を読む

- 経験とは何かを考える -

私どもはみんな一人一人経験を持っているわけです。経験を通らないものは何もない。たとえ信仰であっても、私どもの経験の中に起こってまいります。神様との交渉の結果として、そこに起こってくる。けれども、起こってくる場も経験の場しかないわけです。

ただ、その経験について一言だけここで肝心なことを申し上げますと、この私ども一人一人が背負っている経験、この経験だけは誰とも共有することができないのです。例えば人間が尊厳であるということを他人が言っているから自分もそうかなと思っている、それは経験ではない。自分でそれを認めるときに、自分がそれについてコンヴィクション(conviction)を持ったときに、それが経験になってくるわけです。一言だけこの経験の世界のことを申しますと、この経験の世界というのは、人から聞いたことではなくて、また人をまねすることではなくて、自分でものごとを発見していく世界だということです。ディスカヴァーしていく世界。一つの発見の世界だということが、私ども一人一人が持っている経験の一番大きな特色なのです。私どもが経験を持っているということは、これはもう自明なことで、経験を持っていないという人は一人もいないと思います。みんな経験を持っている。しかし、経験の世界の特色は、ほかの世界と全然違いまして、何事かを発見していくということなのです。それからもう一つの特色は、それに伴っておりますが、すべての人間は、対象に経験の中で出会うのです。出会って発見していく。このことだけを経験について申し上げます。

P.26 ~ 27

森有正著「光と闇 - 森有正説教・講演集 - 」日本基督教国出版社 1977年5月25日刊

- 2006年10月17日記 -